

大東アゲハの帳

(7)

虫と語り

紫陽花に雨のしずくが光り、梅雨の晴れ間をぬって野崎観音から飯盛山にかけて、男の子が懐中電灯片手に三三五五集まってくる。

「どこへ行くの」と尋ねると、「ゲンジ取りに行く」という。「昼間は見つけにくいのとちがう」というと、「木の穴に居るから棒でつつくと出て来るんや」

「棒でついたら足が二本折れてしまう」と、片手に持っていたゲンジを見せてくれた。いかにも残念そうに何回もなでていた。

「穴に入っているゲンジを取る方法教えたらか」とつい一週間程前に昔のわんぱく坊主(?)におそわった方法を話してやった。「穴におしっこをかけてやると、びっくりして出て来

るそうやで」「ふーん、おぼちゃん、高い所の穴にはどうしてかけるの」「さあね、そこまでは聞いてないわ、考えてみてよ」といつ

たら、大声で笑いながら二人の少年は山の中へ消えて行った。

夕方から夜にかけて、あるいは夜から早朝にかけてコナラやクヌギなどの樹液に集まるカブト虫やクワガタ虫を求めて山に入る子供たち。昼間は、クヌギや桜などの幹の割れ目に潜むゲンジや土の中にもぐっているカブト虫を捜す。

そんな子供たちの立ち居ふるまいまでが、なんとも頼もしく感じられてくる。「昔は夜になると家の中までカブト虫やクワガタ虫が訪ねて来てくれたんやが」

と、おじいさんが目を細めて、のどかな田園風景を懐しむように話してくれた。

山に家がせまり、家並みが雑木林にすっかり変わり、生活様式がすっかり変わってしまった昨今、たい肥や朽ち木やおがくずなどの中に卵を生む小さな虫たちは、めっきり少なくなっていく。

そして、現代のおとなしい少年たちは、一匹百円前後で養殖カブト虫の幼虫を買い、プラスチックの箱の中で、幼虫からさなぎ、さなぎから成虫への変化を観察しながら育てるのである。

しかし、それはまたまじな方で、昨年こんなことがあった。ある友人が、「大阪市内から遊びに来た子供に『ゲンジ捕りに行こう』と誘ったら、母親にゲンジを買ってくるからお金を無心していた」といって笑いこぼっていた。

なるほど、ペットショップでは、ゲンジがガラスケースの先に竹輪を結わえて田んぼにたらしで大きなエビガニを釣ったという。バケツの中に、洗面器の中に長靴の中に、赤い大きなアメリカザリガニが目をもいでいる。そして、いかにも満足そうな子供たちが「おぼちゃん、アゲハチョウの卵はまだないの」と寄ってくる。去年アゲハチョウのさなぎから羽化する様子を見て感動した近所の子供たちが、私の顔を見るたびに「アゲハチョウの卵は?」「アゲハチョウの幼虫は?」と幾度尋ねてきたことか。

もうすぐ待ちに待ったアゲハチョウやセミの季節がやって来る。

文・水谷信子

